

思い込みとミツバチ

牧師 山本 護

「あらゆる草の根を抜かないで不耕起・不施肥」が自然農の基本。教会の庭もその精神で整えています。ハチを誘引するキンリョウヘン(蘭の一種)は肥料分が足りなくて花を咲かせず、ハチ箱にミツバチがやって来る気配はまるでありません。それをみかねたS氏が、すでにハチが入っているひと箱を十字架の前に置いてくれました。セイヨウミツバチより



二回りくらい小さなニホンミツバチ。箱下の細いスリットを頻繁に出入りし、顔を近づけてもこちらを気にせず、けなげに、黙々と働いています。

田圃側の十字架の下では、今年の春、伐採したナラの木に打ったシイタケ菌糸がひっそり働いているところです。菌糸の繁殖は木の内部で見えませんが、たまに樹皮に現れる痕跡を観察するには辛抱強さが必要です。テンポはそれぞれですが、ミツバチも菌糸も人間も、神の御手によ

る奇跡的な生命の調和によって生かされています。

八ヶ岳教会の聖餐式序詞には「麦がパンになり、葡萄が酒になるまで、人、鳥、昆虫、微生物たちの労働がありました。これら、生きものそれぞれの働きを互いにつなぎあわせておられるのも、主なる神の御配慮です」という一文があります。ニホンミツバチの労働をじっと見つめていると、「これら生きもの」すべての存在をつなぎあわせている柔軟で壮大な神の御手をリアルに感じます。

「この地方一帯では、森に入りさえすれば、地面に蜜があった(サムエル記上 14:25)」。紀元前千年頃のこの地は「乳と蜜が流れる土地」と呼ばれるほど豊かで、森には蜂蜜が滴っていた(14:26)。ところがサウル王はペリシテ軍との戦いのさなか無意味な断食を強い(14:24)、兵士たちは自然の蜂蜜をなめることさえできませんでした(14:26)。

そんな兵士に、サウルの長子ヨナタンは言います。「わたしの父はこの地に煩いをもたらされた。見るがいい。この蜜をほんの少し味わっただけでわたしの目は輝いている(14:29)」。飢えをしのぐ蜂蜜の恵みは、手が届く所に用意されているのに(14:27)、サウルの思い込みの「精神論」で抑圧され、兵士たちは飢えさせられました(14:24)。

思い込み精神による踏み間違い、心当たりがあります。自然の調和に従う不耕起・不施肥への思い込みのために、キンリョウヘンは花をつけなくなり、ミツバチに見放されていたこともその一つです。せめて落ち葉を貯めて発酵させる堆肥場くらいは作ろうか。有機堆肥を林の一面で醸して、「乳と蜜が流れる土地」をめざしましょうか。Ω